

イフジ産業、鶏卵の海外調達率5%に コスト増でも安定供給を優先

2026/01/14 05:00 日本経済新聞電子版 1406文字

イフジ産業は殻を取り除いた液卵向けの鶏卵の海外調達率を2026年3月期に5%に引き上げる。鳥インフルエンザによる供給不足が背景にあり、すでにマレーシアから調達したほか、同国以外の東南アジアの国々などからの調達拡大も検討中。国産に比べてコストが増えるが、安定供給で顧客獲得につなげる考えだ。

液卵工場は福岡県粕屋町などにあり、25年春にマレーシアから1500トンの鶏卵を調達した。前期の販売量と比べると3%に当たる。26年3月期はマレーシアを中心に東南アジアなどからの調達を増やしており、鶏卵調達量全体の5%ほどが海外産になる見込みという。

「国産の鶏卵は鳥インフルエンザの発生で供給が減少している。現在は1カ国からの調達が基本だが、為替や物流コストなどの条件によっては同時に複数の国からの調達を検討している」。イフジ産業の藤井宗徳社長はこう話す。

施設内には鶏卵を割って黄身や白身を取り出し、液卵として貯蔵するタンクが複数ある。顧客の要望に応じて国産と海外産とを分けて生産している。液卵はケーキやパン、マヨネーズなど様々な食品や調味料に使われる。家電や自動車に不可欠の半導体のように食品産業に欠かせない原材料であるとして、同社は「食の半導体」と呼ぶ。

これまでは主に国産の鶏卵を調達してきた。海外産は調達先の国や量、時期、為替にもよるが、物流コストが増えることにより国産よりも調達価格が上昇するためだ。

だが、鳥インフルの流行による鶏の殺処分で国産鶏卵の出荷が大幅に落ち込むケースが近年多発。海外調達の拡大に踏み切るのは、こうしたリスクに備える狙いがある。

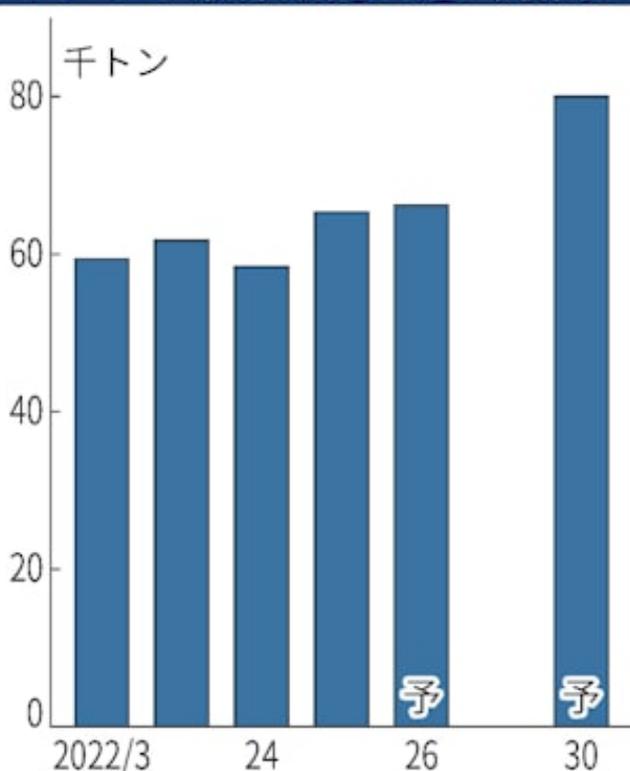
きっかけとなったのは、20年の鳥インフル流行だ。国内で1年間に約980万羽が殺処分となり、鶏卵が供給不足に陥った。同社はこの年、ブラジルから約500トンの調達に踏み切った。

「エッグショック」と呼ばれ、国内で鶏卵が深刻な供給不足に陥った23年には4000トンとブラジルからの調達を大幅に拡大。小規模の取引を含めると、過去10年間で3~4回ほど海外から調達した。25年の調達先については鶏卵の価格や調達量などからコストを減らせるマレーシア産を選んだという。



イフジ産業は海外からの鶏卵の調達を拡大する（福岡県粕屋町の液卵製造設備）

イフジの液卵販売は過去最高に



イフジ産業は海外からの鶏卵の調達を拡大する（福岡県粕屋町の液卵製造設備）

この鶏卵の調達力が業績のけん引役となっている。25年3月期の液卵の販売数量は過去最高の6万5000トンだった。藤井社長は「競合他社は地方の中堅企業などで調達先の数に限られており、複数の調達先を確保している当社に需要が集中する傾向にある」と安定供給の重要性を指摘する。

26年3月期も販売量は過去最高だった前期を上回る6万6000トンを見込んでおり、売上高は過去最高の306億円となる見通しだ。30年には25年3月期比22%増となる8万トンの販売を目指す。

藤井社長は「液卵は用途が多く、販売量が8万トンを超えれば、売上高もおおのずと400億円以上に成長するだろう」と今後の成長に自信をのぞかせる。

鶏卵相場の高騰という追い風も吹く。液卵の価格は鶏卵相場に連動して上下するが、鳥インフルの影響による供給減で相場は高止まりの様相だ。25年の液卵相場の平均は1キログラム当たり前年比3~4割ほど高い300円前後で推移した。

「鳥インフルが全く発生しない年が来ない限り、慢性的な高止まりが毎年続いていく」と藤井社長。「さらに調達先を分散させ、卸先に安定的に供給できるようにしていきたい」と売り上げ増へ意欲を示している。

(中島芙美佳)

【関連記事】

- ・イフジ産業の4~9月、液卵販売6%増で過去最高 純利益は微増
- ・キューピーやコーギーコーナー、卵不足に「耐性」 冷凍液卵や輸入活用
- ・液卵のイフジ産業、ブラジル産鶏卵輸入 国内調達に限界



イフジ産業の藤井宗徳社長

許諾番号NK001535 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.